



フローインジェクション分析化学から

フローインジェクション分析科学へ

静岡福祉大学 石井幹太

以前から標記タイトルに係わるF I Aの展開について考えていたこともあり、またF I A 学術賞を頂戴したときの記念講演でも若干触れたが、F I Aも「化学」から「科学」へと分野を発展拡大する時期が来ているように思える。F I Aの親元の(社)日本分析化学会発行の雑誌の改革が叫ばれた折にも、雑誌名を「 $\cdot\cdot$ 化学」とするのか、「 $\cdot\cdot$ 科学」とするのかいろいろと議論が展開された経緯がある。結果的に和文誌は「 $\cdot\cdot$ 化学」に、欧文誌は「 $\cdot\cdot$ 科学」で落ち着いて効果を発揮している。少々F I Aとは離れるが、小生もいろいろな学問分野を見るにつけ、「科学」や「化学」に留まらずグローバルに学問分野を眺める機会との遭遇や現状の社会情勢等との係わりから、「地域の活性化」を行わねばならない羽目となり、いろいろと研鑽を重ねてきている。世の中とは不思議なもので、世界経済の不況もあつてか、昨年2008年12月に地域活性学会(会長:清成忠男:元法政大学総長・理事長、ベンチャーの名付け親)が設立され、内閣府とのジョイントの下活発な学会活動が展開されている。他の学会同様産学官を基盤にしているが、学会の運営に国の本元が大きく係わっており、「活性化」という名の下にユニークな学会活動を展開している。小生も第1回の学術研究発表会で講演をさせて頂いた。こともあろうに、本誌前号(2009年26巻1号)の巻頭言に愛知工業大学の酒井忠雄教授が「F I Aの活性化」について触れておられる。大変時勢にマッチした提言で、小生も分野違いではあるが心強く感じている昨今である。酒井教授は提言の中で、F I Aにはまだまだハードな部分にも活性化を齎す要素が多分にあることを指摘されておられ、「活性化」の旗印の下F I Aももっともっと発展していくと期待できそうである。小生もF I Aを始めた頃には、正直「研究資金や設備が十分でなかったこと」もF I Aに係わった理由の一つであり、また一方「簡単だけど頭を使うと結構面白い研究ができるものだなあ」と思いながら

F I A創成期から現在までF I Aとお付き合いが続いている。F I Aとの長いお付き合いの中で、F I Aが装置設計など簡単簡素にできることが何か質的に軽く思われる傾向にあるのか、F I Aに振り向く若手研究者が少ないように思えてならない。先端技術など目新しい言葉に魅力を感じるのかも知れないが、一方「化学」や「科学」の基礎的資質の低下が叫ばれている折、教育的および基礎技術的要素を学ぶにはF I Aは最も優れた基礎化学技術であると小生は信じている。この基礎的的化学技術教育があつてこそ質の高い応用研究が展開できるものと小生は思っている。一方、高度な、高価な設備機器に負けないで競争的学術研究を展開するのも挑戦的で結構面白いと感じているのは小生だけであろうか?酒井教授の御提案の「活性化」はこのようなところに原点があるように思える。F I Aの発展には、F I Aの持つ魅力を現状のF I A会員に限らず、もっとグローバルにいろいろな分野に浸透させることが有用に思える。小生など福祉科学に係わる教育研究を進めているが、いざ成果を報告するとなると適切な雑誌や学会がなく困っていることでもある。F I Aの概念を分かりやすくいろいろな分野に説明浸透させると、以外と自分のやることがF I Aの範疇に属するものだと思ひ、F I Aの面白さや分野の広さの理解、加えて会員の増強にも役立つように思われる。小生もタイ国開催の11th I C F I Aで報告させて頂いたが、同じように「河川の流れをF I Aのフローに例えた研究」を群馬大学の板橋英之教授も当時研究されており、環境アセスメント的アプローチ(F I A科学)を展開されておられる。まさに「F I A化学」から「F I A科学」への走りであり、もっとF I A概念の説明とPRを施せばF I Aの裾野の広がりを含め活性化にも繋がるように思える。米国大統領や日本国政党の交代など新しい改編が国内外で進む中、F I Aも「F I A化学」から「F I A科学」へと新規発展拡大することを願う昨今である。